

古河文化見聞録

日本近代洋画の歴史

～古河歴史博物館特別展より～

現在、古河歴史博物館では特別展「日本近代洋画への道」を開催しています。はじめて西洋画を目にして、その逼真的な写実表現に魅了された日本人が、幕末から明治にかけて西洋画をどのように受容し、新しい芸術の表現を創造していったのか、その日本洋画草創期の歴史を紹介するものです。

ところで、当館所蔵の鷹見泉石関係資料(国重要文化財)の中には、司馬江漢「三壘之景図」や「西洋婦人図」などの洋風画も含まれています。すなわち、鎖国下の泉石は、いち早く遠近法や陰影法など西洋画法に倣って描かれた絵画を入手していたのであり、その意味で古河はすでに洋風画との邂逅を果たしていたといえるでしょう。

西洋画との出会い

日本人がはじめて西洋画と出会ったのは意外に古く、キリスト教伝来の16世紀半ばまでさかのぼります。やがて徳川幕府の鎖国政策により西洋画との関わりは一度途絶えます



▲司馬江漢「風景」(笠間日動美術館蔵)

が、八代将軍徳川吉宗の禁書の緩和によって享保以降、多くの西洋の學術書が舶来されて蘭学が盛んになりました。そして、蘭書・銅版画などから西洋画の写実的な表現を獲得する動きが美術の世界にも広まり、司馬江漢らによる江戸系洋風画や長崎系洋風画など洋風表現を取り入れた絵画が誕生します。

開国後、西洋の科学技術を研究する蕃書調所を設置した江戸幕府は、西洋画の研究と指導をおこなう画学局を開設しました。鮭の絵を描いたことで知られている高橋由一も、ここで西洋画を学びますが、その頃の教育はいまだわずかな画材や資料しかない困難な状況下で進められており、必ずしも十分な環境とはいえませんでした。

しかし、程なく西洋人に直接指導を受ける機会がやってきました。その後、洋画の先駆者として活躍する高橋由一、五姓田義松らは、イギリスから報道画家として来日したチャールズ・ワーグマンの指導を受けることになったのです。

洋画教育の展開

明治9(1876)年のこと。明治政府は、西洋美術の技術教育を目的に日本最初の官立美術学校である工部美術学校を創立しました。イタリアから、お雇い外国人を招聘した西洋式美術学校の誕生です。同校には、小山正太郎、浅井忠、五姓田義松、山本芳翠など、その後の洋画界に重要な地位を占める画家たちが入学しました。同時に、ヨーロッパに留学して西洋画の技術を学ぶ画家たちもあらわれはじめます。